

「防災キャンプ in 室戸」

1. 事業の概要

①事業の趣旨

南海トラフ巨大地震のような巨大地震を想定しながら様々な体験活動を行い、地震や津波についての知識を得たり、自分たちにできることを考えたりすることで、自助・共助の力を育む。

②実施期間

第1回目 令和6年10月26日(土)～10月27日(日)

第2回目 令和6年11月23日(土)～11月24日(日)

③活動場所

室戸世界ジオパークセンター

室戸市佐喜浜町都呂津波避難シェルター

④参加者(高知県及び徳島県の小学4～6年生)

第1回目 22名(高知県15名、徳島県7名)

第2回目 24名(高知県19名、徳島県5名)

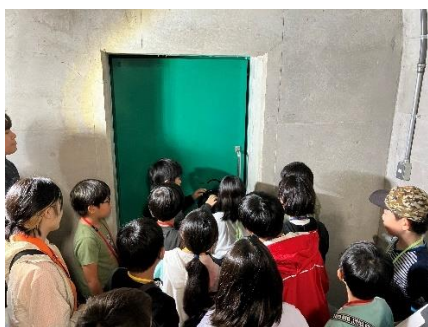
2. 事業の様子

【1日目】

高知県内の小学校及び徳島県の沿岸地域の小学校への広報により、定員(20名)の2倍を超える54名の応募があり、2回に分けて事業を実施した。開講式後の【みんなで考えよう】にて、「地震」「津波」「防災」についてそれぞれの考えを共有した後、「自助」「共助」について学習した。続く【南海トラフ巨大地震や津波について知ろう】では、講師である室戸ジオパーク推進協議会の柿崎氏、杉尾氏により、クイズ形式で地震や津波、室戸の地形的特徴についての学習が展開された。地震がおこるメカニズムや普通の波と津波との波長の違い、災害への備え等について、前向きにクイズに参加し学びを深める様子が見受けられた。さらに、【津波をおこして実験しよう】において津波の現象を観察した。「これが実際におきたら大変だ。」「こうやって第2波がくるんだ。」「地震がおきたらすぐに逃げないと。」などの声が聞こえた。



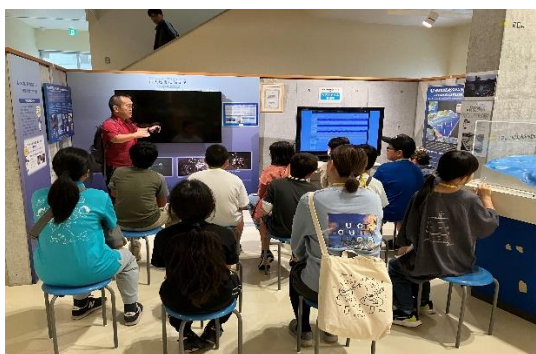
室戸世界ジオパークセンターでの活動終了後、日本唯一の津波避難シェルターである室戸市佐喜浜町都呂津波避難シェルターへ移動した。駐車場にて下車後、実際の避難を想定しながら移動を行った。「5分以内にシェルター内に全員避難をする」という目標のもと、津波避難シェルターを発見し中に入り水密扉を完全に閉めるまでの作業を全て参加者が行った。避難は約4分で完了した。「最初は開け方がわからなかったからドキドキした。」「もっと人が逃げてきていたら大変だと思う。」等の感想や「自分たちの住んでいる地域の避難場所や避難の仕方を知っておかないといけない。」という振り返りが出た。シェルター内外の設備の見学後、ランタンの明かりを囲んでグループワークを行った。24時間の避難生活を想定し、「どのようなものが必要になりそうか」「どんなことに困りそうか」「どのように過ごせばよいか」を話し合い、発表した。多くの意見が出る中で、日頃から災害に備えておくことの重要性や避難生活では周りに配慮をして過ごし、助け合うことなど、自助・共助の大切さについて感じ、考えていた。終了後、各グループに水を支給し、「1班20Lで明日の朝まで過ごす」ことをノルマとした。水の出し方や手を洗うとき、うがいをするときの水の量に工夫をし、限られた水を大切に使う様子が多く見られた。寝床づくりでは、少ないスペースでより多くの人が快適に休めるよう、寝袋の置き方を工夫し、参加者全員が体を伸ばして寝ることができた。



【2日目】

起床後、津波避難シェルターで一晩過ごして考えたことや感じたことを振り返った。「水が自由に使えないことがこんなに大変なんだと知った。」「本当の避難生活はもっと大変だと思う。」「家のベッドで寝れるのはありがたいと思った。」「普段の生活がとても便利で、すごくいいものなんだと感じた。」など、避難生活の大変さを感じたり、日頃何気なく使っているものや過ごしている生活のありがたさについて考えたりしていた。朝食は防災食体験を行い、「マジックライス」と缶詰を食べた。「水を入れておくだけでおいしいご飯が食べられるのはすごい。」「私もお母さんに言って防災食を準備しておきたい。」などの声が聞こえた。

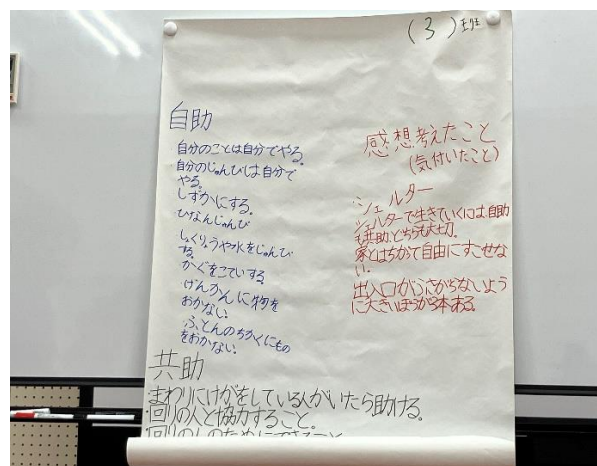
清掃を終え、室戸世界ジオパークセンターへ移動した。【ジオパークセンターを体験しよう】では、講師のお二人から地震の発生を感知し情報を伝達するシステムやプレートの動き等の説明があり、地震や津波への対策や取組についてより詳細に学ぶことができた。



続いて、室戸世界ジオパークセンター前の浜に移動し、磯観察と水辺からの避難訓練を行った。拡声器でのアナウンスを合図に柿崎氏の先導で室戸世界ジオパークセンターの裏山にあるコミュニティーセンターへ5分以内に避難をした。前日の津波シェルターへの避難訓練と比べ、「場所が違くと逃げるところも避難の仕方違うんだ。」と気づきを発表していた。



振り返りでは、1泊2日の体験や考えたことをもとに、自分たちがこれからやっていきたい「自助」「共助」について模造紙にまとめ、発表した。共助について話している中で、「今回のキャンプで学んだことを家族や友達に伝えて、みんなで防災をしていけるようにしたい。」という言葉がでてきたことが非常に印象深かった。





昼食後、閉講式を行い、令和6年度地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業「防災キャンプ in 室戸」を終了した。

3. 参加者の言葉

- ・自助や共助の大切さがわかった。(4年生・女子)
- ・避難生活を体験して、日ごろの準備や水、電気が大切なんだということがわかりました。毎日の生活が一番いいものなんだなと思った。他にも地震や津波に関する施設を見に行きたいです。(4年生・女子)
- ・津波避難シェルターには、人の命や安全を守るための設備や備蓄品があることを学びました。このことをみんなに伝えたいです。(4年生・男子)
- ・今回のキャンプで地震や津波が起きた時の避難場所や避難の仕方がわかった。出かけているときに地震が起きた場合の避難場所も知っておいたほうが良いと思った。(5年生・女子)
- ・日本でひとつしかない津波避難シェルターで水をあまり使わず、お風呂にも入らない生活をした。もしとても強い地震がきたら水も電気も使えなくなるから、自分で食料や水を持ってこないといけないということがわかった。(5年生・男子)
- ・津波避難シェルターで宿泊して、今の日常がどんなに大切なのかわかった。今回学んだことをいかして本当に災害が起こった時に冷静に判断できるようにしたいし、防災バックの確認も忘れず、自分や周りの人の命を守りたい。(5年生・女子)
- ・防災についてくわしく知りたいと思ってこのキャンプに参加しました。私は地震について、何もかも壊してしまって悲しく苦しいものだと思っていたけれど、地震によって地形などが変わり、地震がもたらしてくれる恵みもあることを知れました。みんなで学んだことを家族や周りの人に伝えていきたいなと思いました。(6年生・女子)

4. 事業の成果

- ・室戸市佐喜浜町都呂津波避難シェルターでの避難生活体験や室戸世界ジオパークセンターでの学習など、室戸でだからこそ行える防災学習が行えた。
- ・参加者にとって、災害のおそろしさについて考えるとともに、日常のありがたさや日頃の備えの大切さについて気付き、感じるきっかけとなった。
- ・活動中のつぶやきやアンケートの記載から、参加者の防災意識の高まりが伺えた。また、自分だけではなく

家族や周りの人も助けられるようにしたいと考えられるようになった児童も多かった。

- ・室戸ジオパーク推進協議会、室戸市防災対策課、室戸市生涯学習課等、幅広く連携し事業を実施することができた。

5. 事業の課題

- ・地震や津波、室戸の地形的特徴についての解説が「むずかしい」「細かくイメージできない」と感じる4年生児童がいた。一人一人がより具体的に多くのことを学ぶことができるよう、次回実施の機会には、資料の提示の仕方や説明の文言に工夫を施していきたい。
- ・アンケートやグループ活動でのワークシートを確認すると、実際に聞き取ることのできていなかった言葉や思いがたくさんあった。参加者の子どもたちが意見を述べたり、自分の考えを発表する場をより多く設ける必要がある。